令和６年度第１回横浜環境活動賞審査委員会　会議録	
日　　時	令和６年５月16日（木）15時00分～17時00分
開催場所	市庁舎29階共用会議室　N-05
出　席　者	戸川孝則委員長、為崎緑委員、川村久美子委員、鈴木智香子委員、北村亘委員
欠　席　者	石原信也委員、堀功生委員
開催形態	公開（傍聴者０人）
議　　題	１　横浜環境活動賞が目指す方向性について ２　令和５年度の審議をふまえた事務局案について ３　審査の流れについて ４　スケジュール（案）について
決定事項	１　応募者数を増やし、裾野を拡大するために、受賞者の活動について事務局がx等で継続的に発信する。発信の方法については事務局で検討する。 ２　①児童・生徒・学生の部に「個人」の枠を設ける。 ②推薦の在り方について、書式の簡略化も含めて事務局で引き続き検討を行う。 ③感謝状を出す場合、本表彰制度に相応しくない応募に対する対応、企業にも出すことの要否について、事務局で改めて検討を行う。 ④大賞の選出は必須としない。運用は審査の中で決めていく。 ⑤若者を対象とした特別賞の新設及び名称、GREEN × EXPOとの連携について、事務局で改めて検討を行う。 ⑥応募数が増えることを見越し、今年度はプレゼンテーションをなくす。次年度以降については今年度の応募状況を見た上で検討する。 ⑦事前質問をどの程度受け付けられるか、事務局で検討する。 ⑧応募者とのコミュニケーションの在り方について検討する。
議　　事	○事務局　令和６年度第１回横浜環境活動賞審査委員会を開会します。 本日の委員会は、横浜環境活動賞審査委員会運営要綱第４条３項により、委員の半数以上の出席が得られていますので成立していることを報告します。また、本委員会は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条により公開となっています。また、運営要綱第４条２項により、委員長が議事を進めることとなっています。戸川委員長にお願いします。 **議事１　横浜環境活動賞が目指す方向性** ○事務局　昨年度皆様に議論してもらった内容を踏まえ、第31回活動賞の内容について説明します。 まずは環境活動賞の方向性を確認します。環境に対する意識高揚を図り、環境に配慮した活動を推進し、環境保全型社会の創造を目指します。 環境保全型社会に向け、活動賞をとおして環境に対する意識高揚、環境活動の推進を行っていきます。そのためには、活動賞の裾野を拡大していくことが、この目的に向けて進めていくためのより大きなポイントになると考えています。

	「裾野拡大」というのは、「アウトプット」として、まずは活動賞への応募数が増えることです。「アウトカム」で、その効果として、「活動賞」をとおして環境保全に資する活動が増え、波及性として新たな活動が発掘され、既に活動している人たちのモチベーションアップにもつなげていきたいと思います。これら全体の効果を目的として、この活動賞を行っていきたいと考えております。 　これらを目指すために、活動賞の中で具体的にできる取組として、応募数増加を見据えた応募者の負担軽減、応募数増加とモチベーション向上を見据えた新たな特別賞の設置、応募対象の拡大、モチベーション向上と波及性を見据えて横浜市からの発信を強化していく取組を行っていきたいと考えています。今日、これらを前提に、変更点など話していきたいと思います。 　次のスライドで、社会的背景と環境活動賞の変遷について簡単に触れています。これまで社会的背景や環境の価値は、第１世代から現在の第３世代まで大きく変わってきています。活動賞も 1993 年の創設以来、その時々で変化しながら第 30 回まで継続してきました。今後も、その時々の社会的背景などを踏まえ、よりよい形で変化していく必要があると考えています。 ○戸川委員長　横浜環境活動賞が目指す方向性に対して意見があればよろしくお願いします。 ○為崎委員　以前の議論で、目的について「裾野拡大と先進的な取組をつくっていくことの両方だ」という回答をもらいました。 今回の事務局案では裾野拡大に重点が置かれているようです。どのような経緯でしょうか。 ○事務局　資料のつくりとして裾野拡大に注力しているように見えますが、「横浜市からの発信の強化」の中で、応募された活動について、波及性をねらって我々のほうから発信していきたいと考えています。それにより、また新たな活動の発掘を見据え、これまで以上に活動の広がりをつくっていきたいと考えています。 ○為崎委員　応募された色々な活動の中から先進的なものを見出して発信することで、更に先へつなげていくようなイメージですか。 ○事務局　そうですね。 ○戸川委員長　今回「応募者を増やす」と言っていますが、アクションとして何をしていくか明確にしておかないと、振り返りができません。今やれていることと今回からやることの何が違うのかを明確にしておいたほうが、今後のアップデートにいいだろうと思います。 ○川村委員　Twitter はメディアとして短い情報を順次発信していくものですが、これにふさわしいのだろうかという感じがします。どういう形で Twitter を使って応募を増やすことを考えているのでしょうか。 ○事務局　表彰式後に受賞者の活動について、横浜市ＨＰへ載せて発信をしていました。今年度からは、Twitter で紹介するなど、通年で発信していきたいと思います。

	○川村委員　受賞したグループの活動をその後もフォローしていくのですか。 ○事務局　そうですね。今までは応募して表彰し、それで終わりでした。裾野拡大や新たな発掘も見据え、受賞後に「こういうやり方をしている人たちがいる」というのを色々なツールで発信し、波及性をねらっていきたいと思います。 ○川村委員　そのために取材をするのですか。 ○事務局　やり方についてはまだ分かりません。 ○川村委員　受賞したときに発表会をするだけで終わってしまったのとは少し違う雰囲気です。事務局がやると言っているのは非常にいいことで、期待しています。 ○北村委員　Twitter のアカウントはどうなりますか。横浜市のアカウントなのか、このためにアカウントを取るのでしょうか。 ○事務局　私たちが横浜市として持っている既存のチャンネルを使っていく方向です。 ○北村委員　横浜市の Twitter があるのですか。 ○事務局　「横浜 GO GREEN」という、環境に特化した Twitter アカウントがあります。 ○北村委員　その辺がけっこう大事です。既存のものを使うのか新しくつくるかで波及が違ってきます。 ○事務局　横浜 GO GREEN もそうだし、可能であれば横浜市のアカウントもあります。うまくリンクしながらやれればと思います。もちろん、Twitter だけでなく、色々使っていきたいと思います。 ○北村委員 Twitter は、まず登録している人にしか届かないことになっていると思います。もっと横浜市の市民に届けるときには紙媒体をどう使っていくかということになってきます。広報に載るのか載らないかということがあります。児童・学生の部であれば、全ての学校に「今年変わりました」とチラシを送ったりということです。それぞれの商工会を通じて加入企業に一斉にメールやチラシを送るぐらいのことはできるような気がしています。 ○戸川委員長　方法論に関しては事務局に任せるしかありません。我々もできる限り声掛けをしたいと思います。 ○為崎委員　横浜市で開催する「GREEN × EXPO　2027」との連動が大きな目標としてあるのかなと感じました。環境活動賞は EXPO 開催の 2027 年まで連動させて、それ以降は異なった方針を取っていくのですか。それとも、EXPO 開催は一つの通過点で、同じ方針を継続していくのですか。 ○事務局　2027 年の GREEN × EXPO は、確かに横浜市としては大きなトピックとしてとらえています。今、全体として気運醸成していく方向にあります。 　2027 年の後はまた 2030 年もあるとは思います。環境活動賞についてもそういった中で少しずつ変わりながら、その時の社会背景に合ったよりよい形にしていきたいと思っています。ただ、環境をテーマとした大きなトピックがあるので、相乗効果があればいいとは思いますが、これに向けて環境活動賞をやっていくというの

	ではなく、その都度形を変えながらやっていきたいと思います。**議事２　令和５年度の審議をふまえた事務局案** 〇事務局　ここからは、今年度の変更点について説明します。 　これまで児童・生徒・学生の部については、学校等を想定して団体のみ募集対象になっていましたが、新たに個人での応募も可能とします。前回の活動賞で個人の学生から応募がありました。学生の部に個人の応募枠がなく、市民の部の中で個人として応募や審査を行わざるを得ませんでした。そのため、今回からは学生等も個人の部に応募ができるように変更しようと思います。 〇一同　異議なし 〇事務局　次は「推薦」についてです。これまでは主に横浜市の各部署から、推薦枠として推薦状を付けて応募してもらっていました。実際に推薦の有無が審査に影響することはありません。推薦状をつくることが各部署の負担になり、推薦につながっていない可能性を考慮し、今回は推薦を取り止めることにしたいと思います。 　ただ、各部署への募集の呼び掛けは引き続き行います。推薦自体も例年、１件程度であるため、取り止めることで影響はほとんどないと考えています。 〇北村委員　それぞれの部署が推薦状を書くのが負担だというのは非常によく分かります。一方で、推薦状があるから裾野を広げてきた感じはあります。負担だから推薦状がなくなることと、どちらがいいのでしょうか。「誰かのためになるなら」と思っていたのが、ただの呼び掛けになると、意識から消えてしまいそうです。 〇戸川委員長　そのとおりだと思います。確かに手間ですが、それで背中を押されている団体は間違いなくあります。そういう効果はあったと思っています。　推薦の数が少ないから切り捨てるのかといったら、私は逆に、そうではないだろうと思います。全部署から１個ずつ出てきたら、相当な数になるのではないかと思います。 〇川村委員　「審査には直接、影響は与えていない」と言いましたが、審査委員としては、彼らが環境という切り口で取り出した活動を、横浜市の部局の中で色々と見定めていたことは事実かと思います。環境という切り口で活動を見たときにどういうものが見えるかを色々な部局が考えてくれることだけでも、随分大きいと思います。興味を持って見てもらうことも大事だったのではないでしょうか。 〇北村委員　特に今回、新しく変えようとしているタイミングで取り止めてしまうのはもったいないです。推薦が大変で将来取り止めるにしても、少なくとも今はやめ時ではないと思います。大変だということなら、団体名と推薦理由をチェックシートにして書式を簡略化したらと思います。 〇戸川委員長　推薦にあたり、その部局のどこまで決裁をもらうかという話になってくるので、相当難しいだろうと思います。責任を持って推薦できるのかということを確認しないといけません。それであれば、もう少しカジュアルに声掛けができる仕組みが欲しいです。簡素化して声をかけやすくする方向がよいのではないでしょうか。 〇事務局　私たちの依頼の仕方なのだと思います。「推薦」という決まった形には

	めなくてもということです。「各部署で環境について考えてもらうだけでも」との意見がありました。そこを満たしたレベルでの呼び掛けはしていかなければと思っています。 ○為崎委員　推薦という形でなくても「ここの部局からの案内を経て上がってきた候補者だ」というのが分かると良いように思います。 ○事務局　「今、やめ時ではない」との意見もありました。いただいた意見をもとに再度検討します。 ○川村委員　今までの「推薦」というのは、依頼をしたら１者は推薦するという、ノルマがあったのでしょうか。 ○事務局　ノルマはありません。 ○戸川委員長　事務局、一考をお願いします。せっかくある推薦の仕組みを今、わざわざなくす必要はないのではないかという意見があります。ただ、今の形式だと推薦の数が伸びていないのも理解できています。では、どうするかということです。 　推薦状を書いてもらうことが目的ではないと思います。 ○為崎委員　やはり推薦で上がってきているということは、推薦された活動は基盤がしっかりしているのだろうという印象を持ちます。でも、実際に点数を付けるときには純粋な活動内容で見ます。そこまで意識して付けてはいないと思います。 ○北村委員　項目にある「地域への貢献性」で、ほかの行政などとちゃんと連携があることを確認すると思います。そういったところの点数は高くなりやすいですが、推薦だから全般的に多めに付けようということではないと思います。 ○事務局　次に、各賞についてです。大賞、実践賞、特別賞のどれにも該当しなかった方には感謝状を渡します。活動している方のモチベーションアップや励みにつなげ、応募者が「賞をもらえなかった」で終わらないように、こちらから感謝の意を示したいと考えています。 　大賞についてです。これまで各部門から最高得点の１者が選出されていました。今回から、各部門から特に顕著な成績を納めた１者とし、大賞の選出は必須としません。基本的に、最も点数の高い応募者を大賞と想定することは変わりませんが、申込みが極端に少ない場合や例年と比べて最高点がかなり低かった等の特殊なケースを想定しています。その際、「大賞の該当者なし」の選択肢を増やすことがこの変更の趣旨です。 　次に特別賞の新設についてです。事務局として考えた新たな特別賞の名称が「GREEN × EXPO 2027 特別賞」です。内容については、これまで審議してもらったとおりです。児童・生徒・学生の部の応募者から、将来性や今後の活動の発展性を期待できる１者へ特別賞を贈呈します。 　名称について、2027 年に横浜で開催される GREEN × EXPO から取っています。環境をテーマとする博覧会について、横浜市として全体で気運醸成を積極的に行っていきます。活動賞との親和性もあると考え、新たな特別賞の名称は「GREEN

	×EXPO 2027 特別賞」としたいと思います。 　特別賞の選出の際には、応募用紙の７「今後の活動方針」の項目を主に参考にします。その際、「活動が発展していく見込みがあるか」、「地域や他団体等への今後の活動の広がりがみられるか」、「活動を継続していくための計画がしっかりできているか」ということです。学業等との関係で活動を中断することも考慮した上で評価してもらいます。 ○戸川委員長　大きく三つあったので、一つずついきましょう。まず感謝状の件です。賞の該当がない方がいた場合に感謝状を送る案が出ました。 ○川村委員　「感謝状」という名称に抵抗があります。「応募してくれてありがとう」なのか、「環境活動してくれてありがとう」なのでしょうか。誰が何に感謝するのか分かりません。 ○事務局　応募してくれてではなく、活動してもらうことへの感謝を想定しています。賞の目的は、活動の推進と、励みになるようにということです。活動賞としての目的を踏まえての感謝状です。 ○鈴木委員　日頃活動していると、なかなか感謝されることがありません。活動賞に出すと、日頃の活動に加えて書類を揃えたり、けっこう煩雑です。頑張って出したけれども駄目だったときに、感謝状があるとうれしいかなと思います。 ○戸川委員長　説得力がありますね。今、一生懸命やっている人たちに対し、「今までありがとう。お疲れさま」というのは伝えたいということで、感謝状に意味が込められればいいと思います。 ○為崎委員　名称は別として、応募すれば感謝状はもらえるという理解でいいですか。 ○事務局　はい。 ○為崎委員　今までありませんでしたが、活動としてよくても、環境活動賞の対象としては相応しくないものが出てきたとき、全員に感謝状を出すことに問題はないかと感じました。今まで相応しくない応募はありませんが。 ○戸川委員長　全員に参加賞をあげることで、手を挙げる人が出てきたらどうしようかということですね。 ○鈴木委員　事務局のほうで、事前に「これは少し違うので」ということで返すことはないのですか。 ○戸川委員長　しない方針だと思います。書き切れていないことに関して「書いてください」と促してはいますが、最終的にエントリーシートは提出者のものです。 ○事務局　返すことは確かにできないと思います。 ○戸川委員長　しかし、横浜市から感謝状をもらうためだけに応募する方が出てきたときにどうするか、リスク管理をしなければならないと思います。 ○川村委員　お礼の手紙ぐらいにとどめてもいいのかなと思います。 ○戸川委員長　できれば感謝状でと思っていますが、想定していないことが起きたときに対応できないと、ちょっと怖いかなと思っています。

	○川村委員　企業が感謝状をもらうと、「横浜市から感謝状をもらった企業」ということで、インパクトが大きいです。 ○事務局　こちらで再度検討し、委員長にご相談させてください。 ○戸川委員長　リスク管理もしなければならないことが今、共通認識としてありました。感謝状に関して、市民の活動者の励みになることは間違いないと思います。 ○戸川委員長　次に、大賞についてです。今までは、一番高い点数を自動的に選出していました。今回からは「これでいいのか」というのを判断する話になります。 ○北村委員　ここで審査基準を決めるよりも、運用しながら決めていくのがいいかなと思います。大賞が自動で選出されると、これまでも疑義がでる年がありました。「少しこれは物足りない」というときに最終的に大賞として選出するのか、多数決などで決めていく形になると思います。点数が高く、満場一致で「これが大賞でいいのではないか」という年は多分あると思います。今決めたことが５年後に通用しなくなると思っています。 ○戸川委員長　本当は、運用として決まったものがある方が我々としてはいいですが、今ここで決めてもなかなか難しいのは間違いないと思います。運用しながら決めていくことでどうでしょうか。 ○川村委員　私たちはそれぞれ選抜経験を積んできているので、大賞を決めるときに合意を得やすいですが、委員が替わったとき、どのように選抜方法の情報を残していくのでしょうか。何らかの形にしていくことはお願いしたいです。 ○為崎委員　大賞決定の総意形成の方法も変わることもあり得るのではないでしょうか。同じメンバーでやっていくと視点が固まっていくところもあります。多様なメンバーで構成すると、色々な視点から見られます。色々な視点から見て総意が得られるものが大賞にふさわしいと思います。毎年出てくるものが違ってくるので、大賞の基準を明確にするのは難しいような気がします。例えば若い世代が審査委員に入ってきた時に、全く違った視点を持ち込んできてもいいのかもしれないという思いがあります。 ○川村委員　どちらが良い悪いで意見が割れることもあると思います。単純なルールでもいいので、必要だと思います。 ○戸川委員長　それだけはやっておきたいと思っています。多数決でいいのかどうかはずっと悩んでいます。大賞とはそういうものではないかもしれません。委員全員の賛成がなければ大賞にはならないというのがまず１個目のルールとしてあってもいいかと思います。履歴として残しておくことは必要だと思います。それが積み重なっていくと、ある程度ノウハウになっていきます。変えてもいいですが、次の世代に渡す情報として残していきましょう。 　つきましては、大賞については、「ない」という判断を我々ができるようにしました。

	○戸川委員長　次に、「GREEN × EXPO 2027 特別賞」です。GREEN × EXPO と児童・生徒・学生の部の親和性がのみ込めませんでした。 ○事務局　「GREEN × EXPO 2027」があって、環境のショーケースにしたいということで一生懸命つくっています。それと環境活動賞とは親和性があるかと思います。また、「幸せな明日をつくる風景」というのが GREEN × EXPO のメインテーマです。次世代が担っていくから非常に期待の星だという意味合いです。将来性、発展性を期待できるということです。 ○戸川委員長　GREEN × EXPO と活動賞のロジックをしっかりつくっておかないと、最終的に、GREEN × EXPO と我々の活動賞の掛け算ができなくなってしまうのです。せっかくここまでやるのだったら、2027 年の開催のときには、過去の受賞者が登壇できるような仕組みをつくってほしいです。受賞者が並んでディスカッションしているコーナーがあるとワクワクします。 　そういう点を含めて GREEN × EXPO の担当課と調整してほしいです。 ○事務局　はい、調整していきます。 ○戸川委員長　せっかくコラボするならそうしないと掛け算になりません。もったいないし、もらった人がうれしい賞になるのかが一番のポイントです。 ○川村委員　この特別賞をもらう人たちは、新しい世代への期待ということで、背景にある論理が少し分かってきました。横浜市の事業と自分の賞がどう関係するか、ちゃんと説明が必要です。同じ横浜市なのだから、お互いの事業が反映し合えるようにしないと意義がなくなってしまいます。 ○為崎委員　応募の対象者を明確に示せば若者のための賞だと分かることではありますが、この名称が若者に届くかが気になりました。一般の人たちは、GREEN × EXPO に「次世代への期待」というものも込められていることは知りません。賞の名前だけを見たときに、若者以外の世代が「自分たちだって環境のためにこれだけ頑張っているのに、なぜ若者だけなのか」とならないでしょうか。「未来」というように、若者に向けたメッセージ性を持つ名称のほうがいいのかなと思いました。 　これが期間限定でなければ 2027 年以降も続くわけです。GREEN × EXPO が終わっても、その名称がついた賞にするのかということもあると思います。若者に響く名称のほうがいいかなと思いました。 ○北村委員　私は正直、これはやめたほうがいいと思っています。 　これは園芸博なので、緑化に振り切ったようなものを環境活動賞としてやっているのだと、環境活動賞応募者が誤解してしまうのではないかと思います。GREEN × EXPO 側が「そういう賞をつくってください」と言ってきているわけではない中で、全然盛り上がらないようなことになりかねません。一旦、置いておいてもいいのかなと思います。もう一つ、これは大賞と差別化できるかという話です。これまでも生物多様性特別賞がありました。環境活動の中でも生物多様性という特殊な部分に対して賞を与えるということですごく分かりやすかったです。

	GREEN × EXPO 特別賞というのは、大賞にもう１個賞が付いてくるぐらいになってしまうのではないかと思います。違う視点が見えにくいです。 ○戸川委員長　児童・生徒の部の大賞と特別賞の違いが分からないということですか。 ○北村委員　「生物多様性特別賞」というと、「ほかの環境活動にない生き物をやっているか」と、一生懸命探しました。逆に「GREEN × EXPO 賞」の審査で何を探していったらいいのか、想像できません。 ○鈴木委員　一市民からは、GREEN × EXPO をやっているところも環境活動賞をやっているところもみんな一緒にしか見えません。今、色々なところにポスターが貼ってあり、子供たちは色々なところで「GREEN × EXPO」という言葉は見ます。学校にも貼ってあります。そこはささるのではないかと思います。 ○戸川委員長　そうすると、この名称の賞だとうれしいということですか。 ○鈴木委員　子供たちにしてみれば、特別感はあると思います。 ○戸川委員長　非常に悩ましいです。「将来性、今後の発展を期待できる者」の一文で一者を選定する難しさを考えると、大賞とどう違う形で選ぶのだろうかと思うわけです。間違いなく大賞と同じ傾向のものが毎年出てきます。 児童・生徒・学生の部の評価軸が GREEN × EXPO に寄っていってしまったらどうしようかとも思います。 ○北村委員　園芸寄りになってしまうことは懸念します。 一番の懸念は、やはり大賞と区別できないものをわざわざ新しいカテゴリーにするのは大変ではないかと思います。 ○川村委員　GREEN × EXPO 特別賞は、2027 年だけやるのでしょうか。 ○戸川委員長　少なくとも 2027 年までは続くだろうなと思います。 ○事務局　それ以後はこのままなのか、名称を変えるかの選択肢があります。 ○川村委員　一時的なものだという感じがしていたからいいと思いましたが、いつまでも続いていくのはおかしいです。 ○事務局　この特別賞は、前回の若い個人にもっと光を当てたいところから始まった話です。将来性や発展性の趣旨で、あげたいというところがあります。あげるときに名称をどうするか、事務局でも考えました。 ○戸川委員長　大賞でないものが選ばれるのはものすごく違和感があります。 ○北村委員　生物多様性特別賞だとその違和感はありません。 ○戸川委員長　それは見ている視点が若干違うからです。 ○川村委員　生物多様性は、別に児童・生徒・学生から絶対に選ばなければならないわけではありません。もっと広い感じがします。 ○北村委員　生物多様性特別賞と並列ぐらいの立て付けになっているのではないですか。 ○戸川委員長　名前が「特別賞」ですから。 ○川村委員　「児童・生徒・学生の部」に限定しているわけです。

	○北村委員　本来はもっと小さな賞として置かれるべき性質のものではないでしょうか。 　「コンセプトが一緒」というのも少し疑っています。 ○事務局　もちろんピッタリ一致するものではないことも承知しています。次世代に向けてのところです。 ○北村委員　横浜環境活動賞がそちらに引っ張られるのも嫌です。 ○戸川委員長　このロジックが明確に説明できることが間違いなく必要です。なぜ横浜環境活動賞と「GREEN × EXPO」なのか、我々が大きく外に発信できるような一文が作れないと、納得できないだろうと思います。 ○為崎委員　名称は別にこれでなければいけないわけではないですね。今、名称にすごく引っ張られているような気がします。若者を掘り起こしたいから特別賞というのは賛成する部分です。 　大賞というのは多分、総合力が必要です。それぞれの項目で点数が高くないと受賞が難しいと思います。 　応募時点での総合力は高くないけれど、キラリと光る１点があるかどうかということが、特別賞をつくる意味かと思っています。 　例えば、若者なのでアイディアはとてもいいけれど、今はまだネットワークができていないとか、まだ評価できるところまではいっていないけれど、今後大きな期待が持てるとか、周りへの高い波及性が見込めるなど、そうした応募が出てくるのかどうかにかかっているような気がします。そうであれば、キラリと光った特別賞が設けられると思います。 　名称は別として、例えば、「特別賞を設けました。新たな特別賞ですが、残念ながら初年度、受賞者はいません」という、該当なしの選択もあり得ますか。 ○事務局　制度的にはもちろん、「該当者なし」もあると思います。ただ、「特別賞を新設した」という見出しで募集をかけるので、１年目で「該当者なし」は、事務局としてはできれば避けたいのが正直なところです。 ○川村委員　児童・生徒・学生の部にどれぐらいの応募があるのかによります。三つぐらいしか応募がないこともあり得ます。そこに大賞と特別賞を設けてしまうのはどうかと思います。それでもやるのかということです。 ○事務局　大賞との区別については、為崎委員が言ったところを重視してつくりました。昨年の市民の部に応募した若者は、やはり総合力に欠けていたところがあったから大賞に選ばれなかったところもあると思います。学生の活動について、「まだ自分だけでほかと全然関わりを持っていない」とか、継続性の点数が低くて大賞になれないということがあるのではないかということです。波及性や今後の活動についてしっかり考えられていれば、それに期待して賞をあげようという意味合いです。前回の活動賞の応募者を参考に、「こういう特別賞があったら」という思いで事務局から提案しました。 ○北村委員　GREEN × EXPO の「未来」といった言葉を考えると、「キラリと光

	るものがある」というのとは多分コンセプトが違うと思います。私自身はそういうコンセプトで人を引き上げたり、賞をあげるのはいいと思いますが、これは世間一般的に言われている「審査委員特別賞」です。そんなものでいいのではないかと思っています。「大賞ではないけれど、どうしても何かあげたい」ということで審査委員特別賞を出すものはたくさんあります。 〇川村委員　今回、児童・生徒・学生に個人を入れたり、特別賞を考えたり、けっこう変化があります。昨年度、１人でやっている人がいて、キラリと光るものがある人が出てきたので、それに対応ということで皆さんが言っていますが、本当にその流れが今後も続いていくのでしょうか。今回そうするのは非常にいいですが、その流れが今後も続いていくのかどうかあまり保証がありません。そんなに変えていいのかどうかというのもあります。もしやるのだったら掘り起こしがちゃんとできているのかどうかが大事だと思います。 〇北村委員　最終的には戸川委員長と事務局に任せなければいけませんが、私の案としては、やはり無理に新しい賞をつくるより、「審査委員特別賞を出すことができる」というような内規にしておけばと思います。GREEN × EXPO に関しては今年は連携を見送ってもいいのではないかと思います。位置付けがまだはっきりしない中、６月の募集で「GREEN × EXPO 賞をつくりました」と言っても、2027 年に何もなかったり、賞を取った人が呼ばれないようなことにならないでしょうか。そんなことになるよりは、もう少し調整してもらいたいです。 〇事務局　今、二つ課題があります。児童・生徒・学生の特別賞を設置すること自体のよしあしと、名称を「GREEN × EXPO」にするべきか違う名称にするべきなのかだと思います。 〇北村委員　名称の問題ではなく、GREEN × EXPO と連携できるのかどうかです。 〇事務局　名称をそれにするからには、しっかりした中身を伴って設置しなければいけないというところだと思います。 〇戸川委員長　基本的に特別賞をつくること自体に反対している人はいないと理解しています。その立付けをどうするのかが非常に悩ましいです。キラリと光る逸材賞ということなのだろうけれど。「もらったほうがいい冠は何か」というのを前回投げていました。「審査委員会特別賞」が望ましい感じですが、やはりもう少し、キラリと光る感じが出せたらいいということで投げて、今回の提案になっています。やりたいということは悪くないです。ですが、そのロジックは大丈夫かというのがすごく不安です。今年やったけれども、来年から「その名前を使ったら駄目だ」と言われたら元も子もないことになります。そこまで考慮に入れているかが重要です。掛け算するならそれなりの覚悟や仕込みがあったほうがいいです。 「まだまだだけれど、将来性を期待できる」ところを掘り起こしたいというところは間違いなく合意だと思います。事務局に再度検討してもらいましょう。

	○事務局　次にプレゼンテーションの廃止についてです。これまで主に応募用紙とプレゼンテーションで審査を行っていましたが、書類のみで選考を行う形にさせてもらいたいです。 　理由としては、裾野拡大のために応募者の負担軽減を一番中心に見据えています。プレゼンを実施することで、応募者の資料作成等の準備、当日の時間拘束など負担が大きいです。活動者の裾野を拡大し、応募しやすいようにしていく中で、プレゼンテーションをやめる判断をしました。 　一方で、皆さんにとっては審査の材料が少なくなってしまうデメリットも当然あるかと思います。できる限り書類にしっかり書いてもらうことを事務局から働きかけていきたいと思っています。 　今回、応募要項や応募用紙の様式も工夫しています。応募者に、書類のみで決定することを認識してもらうこと、応募用紙の書き方のポイントを示し、できる限り詳細に書いてもらえるようにしています。裾野を拡大して応募者を増やしていきたいという中で、変更が必要と判断し、このような提案をしました。 ○戸川委員長　もともと事前質問とプレゼンは、どうやって多くの情報を引き出して表彰まで持っていくのかというこちら側の意図がありました。そうではなく、エントリーシート、書面審査のみで今回やるということです。これをどう思うかです。今回は、応募用紙にチェック欄で審査基準を付け加えています。これは大きいかなと思っています。エントリーに慣れている企業などはこのとおりに書くので難しくないですが、市民団体の人やエントリーに慣れていない人は思いを書くことが強くなるので、書き切った後燃え尽きてしまいます。そうすると、必要事項が足りていないことがあります。このチェックリストは、私は非常に有効だと思います。 ○川村委員　プレゼンテーションというのは、私たちが情報を得て審査に向かうだけでなく、顔を合わせることがけっこう大事です。彼らにとっては自分たちの活動をプレゼンすることが非常に大事です。審査の一部とするかは別として、何らかの形で審査委員と対象者の顔合わせをして、結び付きをつくり出せればと思います。 ○為崎委員　とりあえず今年度、プレゼンをやめてみようということなのか、これ以降数年間はやらないということなのか、どちらですか。 ○事務局　今回以降、プレゼンはなしにしようかという話です。 ○為崎委員　そこにはリスクのようなものも感じています。私は書類審査だけの時代を知りません。顔を合わせての情報はけっこう貴重になっています。書面だけで本当に正しい審査ができるのかという不安があります。裾野を広げるためにプレゼンをなくしてみるというのは、それはひとつ意味があるとは思いますが、「これ以降やらない」と決定してしまうのはどうかと思います。「今年はやらない」ということで一度書類審査だけにしてみて、応募者が増える効果がどのぐらいあるのか、逆にプレゼンをしないことのマイナスがどのようにあったのかを検証したらよいのではないかと思います。 ○事務局　今後プレゼンを全くなくすということではありません。方向性としては

	考えていましたが、実際にやってみて、検討します。 ○為崎委員　プレゼンも事前質問もなしにすると、かなり限られた情報で判断することになり、正しい判断ができるか不安です。プレゼンをしないなら、せめて事前質問で足りない情報を得る場は欲しいです。全員の質問を合わせるとけっこうな数になるので、答えるほうは負担かもしれませんが。やはりどちらかはやったほうがいいのかなという気はしました。 ○鈴木委員　前回の最後のプレゼンのときも、子供たちが大勢市役所に来て発表したり、若い人たちも皆の前でしっかりアイディアを出したりしました。少なくとも児童・生徒・学生の部はプレゼンの場を残し、機会をつくるのもこの事業で大事なことではないかと思います。 ○北村委員　書き慣れていない人がいる中で、書面の中だけでは情報が全然出てきません。事前採点して、「この辺に何かありそうだから、ここについて聞こう。もう少しここを掘り下げたい」というのがたくさんあります。私は生物多様性特別賞などかなり気にしながら見ています。それを確認できる場がプレゼンです。 　プレゼンだと生の反応が見られます。「実はここに熱い思いがあったのだな」とか、「ここは考えていなかったな」というのがあります。 ○戸川委員長　プレゼンに関しては、私はなくていいかなと思っています。「母数を多くしよう」と言っていますが、1 日 20 ちょっとしかできません。これはもう事実です。これ自体を変えなければなりません。 1 次選考で 100 から 20 にしぼる過程をつくるのかということになります。 　例えば 30 か 40 あったときに、二日かけてやるかという話にもなります。それはやはり現実的ではないというのが私の中ではあります。プレゼンをなくすことは、私は割と賛成でした。 ○北村委員　想定する組数ですよね。 ○戸川委員長　事務局は全身全霊をかけて、増やすことをやってくれるようにと、私はずっと言っています。圧倒的に増えないと、今回の改定は何の意味もありません。それはものすごくこだわっています。その想定でいくと、私はプレゼンは難しいだろうと思います。 ○北村委員　100 組やるのが現実的でないのはそのとおりです。戸川委員長はそこまで想定しているということですが、私はそこまではこないのではないかと想定しています。 ○川村委員　100 件になったら大喜びですが、本当にそうかなと思います。 ○北村委員　そうです。 ○川村委員　出すほうにとっては、プレゼンがあることはけっこうな重荷なのでしょうか。 ○戸川委員長　両方だと思います。生き生きとやっている人も、清水の舞台に立ったような人もいます。 　ただ、いいことだとは思います。やって悪いことは一つもないとは思いますが、

	実際、ロジックとしてできるのかというのが私の中では一番思っています。やろうとしている目標に対してです。 ○鈴木委員　今、地道に市民活動をするような団体も本当に減っています。私はまち普請の審査委員やみどりアップに関わっています。まち普請の募集は昨年、賞金を増やしましたが、全然増えませんでした。違う視点で増やさないと、「環境活動をやっている人は手を挙げて」と言ってもなかなか増えないだろうと思います。「あなたのやっていることも環境活動だ」と言ってあげるぐらいでないと応募は増えません。 ○北村委員　みんなは、少ない場合はやってもいい、多い場合は無理だと思っている中で、今年がまだ読めません。でも、募集の段階でプレゼンありなしの発表をしなければなりません。とりあえず今年はなくして、たくさん来ることを想定し、次年度以降、今年の応募数を参考に検討する方がいいと思います。事前質問はどうしましょうか。 ○戸川委員長　事務局でどのぐらいやれるかどうか、１回検討してください。 　我々の思いとしては、間違いなく質問したいのです。何とかして点数を付けたいのです。なければ付けられません。 　川村さんから最初にあったような、受賞者とのコミュニケーションをどうするのかというのは何か考えるべきだと思っています。最初は「エントリーした人たちだけのコミュニケーションもある」という話でした。それもそうだと思います。コロナで途中で消えてしまいましたが、表彰式には全部のパネルを貼るような仕組みも１回つくったと思います。そういうことも今、ゼロクリアになってしまっています。少なくとも受賞者たちのコミュニケーションで次の掛け算のシナジーが生まれるような仕組みにはしたいと我々は考えています。そこも計画として入れてもらいたいです。 **議事３　審査の流れ** ○事務局　審査の流れです。事務局で応募を受け付けるので、それを取りまとめて、皆さんに事前に読んでもらい、事前に採点表を提出してもらいたいと考えています。 　皆さんが審査してくれたのを事務局で集計します。当日にそれをお見せして、配点等を見ながら皆さんに議論して賞を決めてもらいます。 ○戸川委員長　これに関しては特に異論もないだろうと思っています。事前に見て質問したいと言っているぐらいですから。 ○川村委員　質問が審査委員から来るのか事務局から来るのかでかなりスケールが違います。審査委員会からの事前質問あれば「こういう情報を追加してください」というのを事務局からインタラクティブに言ってもいいかなと思います。 ○戸川委員長　「審査委員からの質問」として送ると、回答のハードルがものすごく高いです。

	○川村委員　どうしても聞きたいことがあったら事務局に言ったほうがいいです。 ○戸川委員長　委員からの質問を事務局へ送り、「事務局からの質問です」の形でやりとりをしてもらうのがいいです。審査委員会からだと、たくさん書かないといけないと思い、ストレスになります。 **議事４　スケジュール（案）** ○事務局　６月 25 日から募集開始予定です。８月 15 日に募集を締め切り、第２回審査委員会を 10 月 16 日か 24 日で行います。表彰式は 12 月か１月を想定しています。 　今日出たご意見をもとに事務局で再検討し、委員長を中心に確認します。 ○戸川委員長　スケジュールに関しては了解しました。第１回審査委員会はこれで終了します。ありがとうございました。
資　　料	資料１　横浜環境活動賞審査委員会　委員名簿 資料２　横浜環境活動賞実施要綱 資料３　横浜環境活動賞審査委員会運営要綱 資料４　令和６年度第１回横浜環境活動賞審査委員会 参考資料１　前回議論の振り返り 参考資料２　第 31 回審査基準について 参考資料３　第 31 回応募用紙（市民の部） 参考資料４　第 31 回応募用紙（企業の部） 参考資料５　第 31 回応募用紙（児童・生徒・学生の部） 参考資料６　募集案内チラシ